

私は、北海道大学大学院生命科学院・博士課程1年時に笹川科学研究助成のご支援をいただきました。研究費の申請書とはどういうものなのか、右も左もわからない中、実験の合間に必死に申請書を書き進めては「どうすればもっと面白さを伝えることができるのだろう」と連日苦悩したことが今でも思い出されます。そのような経験があったからこそ、博士課程への進学を予定していた修士2年目、厳寒期の札幌でそこはかとない不安感・焦燥感に追われていた私にとって、（私の記憶が正しければ補欠枠で）採択連絡のお電話は本当に救いの一報でした。その時に感じた嬉しさはひとしおであり、「自分の研究を認めてくれる人がいるのだ」と自信を持つことができました。

「大学院生のうちに研究助成をいただけたこと」は、その後の研究生活に大きく影響しました。まず、私が笹川科学研究助成に応募した当時は、博士課程に在籍する大学院生への研究支援は限られた団体からしか行われておらず、そのような中で採択していただけたことは、とても励みになりました。また、学生のうちに自分の研究費を持つことにより、それまで意識することが少なかった研究費の大切さに気づかされました。研究費を獲得するための大変さを体験したのはもちろんのこと、その研究費の管理も自身で行う必要があったため、「研究アイデアを書き起こし、第三者に認めてもらい、いただいた研究費を有意義に使うって研究を進める」という研究者として当たり前に行っていなければならぬことを、比較的早期に体験することができました。そのような観点からも、学生の身分で応募可能な笹川科学研究助成のご支援には大変感謝しています。

2008年度の笹川科学研究助成採択から早くも十年以上経過し、その間に助成していただいた「単細胞緑藻クラミドモナスにおける集光アンテナ分子の発現抑制による光環境適応機構の研究」は、国際科学誌である *Journal of Biological Chemistry* 誌に論文発表することができました (Tokutsu et al. [2009] CP29, a monomeric light-harvesting complex II protein, is essential for state transitions in *Chlamydomonas reinhardtii*)。その後は、上記研究での経験を活かし、植物や藻類が強すぎる太陽光から身を守るために発達させてきた「光防御反応」に着目し、その分子機構の全容解明を目指して研究を進めてきました。この十数年の間に、モデル光合成生物である単細胞緑藻における光の受容、細胞内シグナル伝達、光防御活性化までの分子機構を一貫して解明することに成功し、この度、令和3年度・科学技術分野の文部科学大臣表彰・若手科学者賞を受賞することができました。大学院生の時に笹川研究助成に採択されて、研究者として自信を持つキッカケがなければ、このような受賞に至る研究業績を積み重ねることはできなかったかもしれません。

日本国内においては、今なお研究者を目指す大学院生、駆け出しの若手研究者のサポートは決して十分とは言えません。そのような環境の中、笹川科学研究助成は若手研究者の支援事業としては先駆的であり、多くの若手研究者の助けとなってきたことは間違いありません。今後も事業継続・拡大されることで若手研究者の育成環境がより良くなっていくことを期待しています。また、自分の経験からのアドバイスになりますが、大学院生の方には是非とも積極的に笹川科学研究助成へ応募し、大学院生ならではの自由な発想に基づいた萌芽的かつ独自性の高い研究を展開するチャンスを掴んで欲しいと思います。